

# ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集

## 持続可能な社会の実現は、学びの垣根をこえて……2

- タイ政府日本教職員招へいプログラム……6
- 第12回日本代表団派遣支援事業報告会……7
- 中国政府日本教職員招へいプログラム……8
- 韓国政府日本教職員招へいプログラム……8
- サステナブルスクール研修会報告……9
- 文化遺産の保護に資する個別テーマ研修……9
- 気候変動プロジェクト……10
- 活動メモ……11

No. **406**  
2018年11月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行



# 持続可能な社会の実現は、 学びの垣根をこえて

今、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、教育の持つ力の大きさがこれまで以上に注目されています。SDGsにおいて強調される「誰一人取り残さない」世界の実現のために、教育も学校での学びと学校外の学びが両輪となってその目標に向かっていくことが鍵となるでしょう。今求められるACCUの役割とは？—学校教育と学校外教育、両分野で事業を展開する私たちだからこそできることがあると考えます。



**SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS**  
世界を変えるための17の目標  
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です。



## catalyst 触媒としてのACCU

教育協力部長 大安 喜一

私がACCUの事業に初めて関わったのは、今から20年以上前、1996年に行われた識字事業企画会議であった。当時、ACCUの教育事業は、私が所属するユネスコ・バンコク事務所の「アジア太平洋・万人のための教育計画（APPEAL）」と連携して、識字教材開発を中心に地域の教育協力を推進していた。

1990年にタイ・ジョムティエンで行われた「万人のための教育世界会議」では従来の高等教育中心の教育協力から基礎教育重視へのシフトを確認すると共に、学校だけでなく、柔軟で多様な形の教育、学びの必要性が認識された。ただ、識字教育においては、学校教育のようなカリキュラムや教材、人材養成の仕組みが整っていない国が多く、ACCUとAPPEALの事業は、いかに質の伴った学校外教育制度を構築していけるかに取り

組んでいた。

当時の識字支援では、キャンペーンを中心に、ボランティアの指導による読み書きの習得や生活課題を基に文字を学んでいく短期のクラスが中心であり、識字を習得しても、一定期間使わなければまた非識字者に戻ってしまうことが大きな問題であった。識字習得後の学びを継続するためには、学校外でも恒常的な学習の場が必要との認識から、コミュニティ学習センター（CLC）の展開につながった。

従来、様々な機関や住民の手で、コミュニティの学習拠点は作られていた。ユネスコのCLC事業では、そうした経験の蓄積を基に、国の教育政策にCLCを位置付けることを主目的とした。それぞれの国により事情が異なるため、CLCは識字、職業技術、図書などの優先順位

や各地の事情に応じた形で展開してきた。

国の教育制度としてのCLCを整備するにあたり、先進事例として注目されたのが日本の公民館である。戦後まもなく地域振興機関として、また、社会教育施設として長い歴史を持つ公民館から学びたいという多くの国の要望を踏まえて、ユネスコでも2000年代に、ACCUと共同で交流事業を行った。2006年長野県松本市でのアジア・太平洋地域ワークショップではコミュニティにおける関係機関の連携をテーマに、2007年岡山市での公民館サミットでは、CLCと公民館による持続可能な開発のための教育（ESD）を議論し、2014年のESD国際会議をはじめ、その後のCLC-公民館の交流の礎になったと考える。

私は、2016年に20余年勤務したユネスコを退職し、大学勤務を経て、今年7月よりACCUに着任した。現在、ACCUの主な教育事業は、ユネスコスクールを中心とした学校教育におけるESD推進や教職員交流である。ACCUが以前から

行ってきた識字やCLC事業と、現在の学校教育中心の事業をいかに効果的に展開できるか、「つながり」をキーワードに以下に考えてみたい。

2015年9月に国連総会で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の第4目標は「すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」である。この枠組みの中での「つながり」の可能性をいくつか挙げる。

まず、学校教育と社会教育を中心とした教育セクター内および福祉など他分野とのつながりである。文部科学省はユネスコスクールを中心にESDを推進する中で、コミュニティとの連携の重要性について示しており、公民館がその拠点として機能する可能性がある。CLCの先進事例とされた公民館が近年、学校外の多様な学びの場の中で、教育機関としての存在意義が問われる中、ESD推進に向けて学校とのつながりを進めていくことは有意義であると考えます。

次に、日本とアジア・太平洋諸国を中心とした国際的なつながりである。これまでACCUが築いてきたアジア・太平洋地域の識字リソースセンターなどのネットワークを活用し、また、ユネスコの各国事務所や関連機関、東南アジア教育大臣機構との協力、さらには、国内の国際協力機構、国連大学、日本ユネスコ協会連盟などの組織との協働により、ACCUの事業がさらに広がると考える。例えば、SDGsに関する公民館やユネスコスクールの事例や、コミュニティにおける地域づくり連携モデルの交流事業などが考えられる。

最後に、実践と研究のつながりである。分野や組織のつながりを単なる事例紹介だけでなく、これまでの実践や先行研究の分析と、文脈化した活動から普遍的なアプローチの開発を進めることで、知見の蓄積が可能となる。公民館における気づきによる学び、共同学習、地域課題へ

の対応などの経験をCLC関係者に共有すると同時に、基礎教育保障において、アジアの多くの国が導入している学校教育と同等の学力認定制度が、日本の今後の識字教育を議論する一助となるであろう。また、ユネスコスクールを支援する大学間ネットワークは、日本のユニークな取り組みであり、その機能の検証と共に海外との交流を進める意義は高いと考える。

これからのACCUの役割は、分野的、組織的、研究の「つながり」を進め、相乗効果を高めていく触媒（catalyst）であると考えます。現在実施している事業や、新たに出来つつあるネットワークを、知的資本として蓄積していきたい。



7月よりACCUの教育協力部長に着任した大安氏



## SDGs達成に向けたアジア地域ESDワークショップ アジアの仲間と学び合うこれからの地域づくり

9月に入り秋の気配を感じられるようになった岡山市で、アジア15か国から教育行政官や専門家など約30名が集う「SDGs達成に向けたアジア地域ESDワークショップ」が開催されました。

このワークショップは、岡山大学、岡山市、岡山ESD推進協議会、ユネスコそしてACCUが共催して実施した5日間のプログラムで、SDGs達成に向けたコミュニティでのESDの推進について参加各国の経験や岡山市における取り組みを学び合うとともに、アジア地域の関係者間の相互理解や連携を促進することを目的としたものです。

ESDを軸としたコミュニティづくりの先進地域として世界から注目される岡山市で、参加者はどのようなことに気づき、何を学んだのでしょうか。公民館と学校を訪問した後の振り返りのセッションでは、市内の教育施設が学校教育においても社会教育においてもESDという共通の教育目標で通底し連携体制が整っ

ていることや、公民館が世代間交流の場として機能している点などの強みが指摘されました。また、こうした事例の評価に際しては、ACCUが2000年代に開発した「HOPE」のフレームワークが用いられ、参加者からは考察の手法として非常に有効だとの感想も聞きました。長年にわたるACCUの功績が国を超えて生きていることを実感し、職員として誇らし

く感じた瞬間でした。

今回のプログラムは、グループワークを基本として構成し、各国の課題やそれに応じた政策の共有、フィールドビジット、国ごとのアクションプラン作成、そしてこのワークショップでの学びを反映させた模擬レッスンの実施に至るまで、様々な形式で参加型のセッションを設けました。

特に、4グループに分かれて考えたシラバスに基づく最終日の模擬レッスンは、大いに盛り上がりました。CLCでの女性を対象にしたICT講座や中高生向けの自然災害について考える授業など、グループごとに対象者やテーマを自由に設定し、先生と学習者になりきって皆積極的に参加しました。

自国に戻った参加者たちは、早速各々の立場で行動を起こしてくれていることでしょう。明るく熱意にあふれた参加者たちの顔を思い浮かべるとき、世界共通の目標SDGsの達成に向けて、海を越えて多くの仲間がいることに勇気づけられる自分がいます。

教育協力部主任 藤本 早恵子



模擬レッスンを終えた先生たち



訪問した公民館の前で ©岡山市

\* ESDの評価手法として開発され、ESDに大切な4つの性質Holistic、Ownership-based、Participatory/ in Partnership、Empoweringの頭文字から成る。詳細はウェブサイト参照 (<http://www.accu.or.jp/esd/jp/hope/index.html>)。

## 第11回トッパン チャリティコンサート カンボジアのお母さんたちからのメッセージ

教育協力部 若山 洋子

ACCUがカンボジアで展開している母子保健をテーマにした識字教育SMILE Asiaプロジェクト。凸版印刷株式会社様ではトッパンチャリティコンサートを開催し、その収益金をご寄附いただくことで、SMILEの識字教室で学ぶカンボジアの女性を継続的にご支援いただいています。

第11回目の開催となった今年は、現地のパートナー団体であるCWDA<sup>\*1</sup>の職員2名に加え、ACCU職員1名もステージに上がり、ご来場のお客様に直接感謝の気持ちをお伝えする機会をつくっていただきました。そこでカンボジアの識字問題について、そしてSMILE学習者からのメッセージをありのままにお伝えしました。また、当日は会場にご寄附を募るボックスを複数設置し、活動にご賛同いただいた多くのご来場の方々から温かいご支

援を頂戴しました。

多くの方の応援に支えられているSMILE Asiaプロジェクトは、カンボジアでの事業開始から今年で10周年を迎えます。読み書きを学ぶお母さんたちへの支援と、未来の世代の教育と生活の向上を目指し、引き続き全力で励んでいきたいと思えます。会場に響き渡るフルートとハーブの優しく心地よい音色に包まれつつ、そんな覚悟を新たにした夜でした。



写真上：挨拶するACCU職員とカンボジアの団体の方。写真下：演奏者の方々と記念撮影©TOPPAN PRINTING CO.,LTD.

## 国際識字デーイベント2018 識字をめぐる国際動向と国内課題

教育協力部 若山 洋子

ユネスコが制定した国際識字デー（9月8日）を記念して、毎年ACCUでは、同じく国外の識字支援に携わるNGO二団体との共催で「国際識字デーイベント」を開催しており、今年も識字に高い関心を持つ多くの方々にお集まりいただきました。

イベント冒頭、当センター教育協力部長の大安喜一より、識字をめぐる国際的動向について全体に説明があり、続いて海外と日本国内で識字支援に携わる2名の専門家、日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所所長ノン・ブッタ氏と、元夜間中学校教員で基礎教育保障学会事務局長関本保孝氏にご講演いただきました。カンボジアの事例報告では、単なる読み書き計算の習得にとどまらない生涯教育の視点に立った学習支援と、それを支えるマルチステークホルダー・アプローチの重要性が示されました。

続く国内事例の講演では、高学歴社会の日本において息を潜めて生きる非識字者の日常的苦悩が紹介され、国



イベントチラシ



元夜間中学校教員、基礎教育保障学会の関本事務局長

外支援と同時に足元の課題にも着実に意識を寄せていくことの大切さについて参加者それぞれが想いを巡らせました。

一昨年より、国外のみならず日本国内の識字課題にも焦点を当ててきた本イベントですが、「誰一人取り残さない」という理念を掲げる持続可能な開発目標（SDGs）の文脈からも、またその目標達成の一助になるべく日々運営を行っているACCUとしても、大変意義のある記念イベントとなりました。

\* 1カンボジア女性開発協会 (The Cambodian women's Development Association)  
\* 2公益社団法人シャンティ国際ボランティア会、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟



タイ政府日本教職員招へいプログラム

# 人々を魅了する南国タイの教育とは

国際教育交流部 河口 枝里子

記念すべき第1回目のタイ政府日本教職員招へいプログラムが初めて実施されました。バンコクでは、始めにタイ教育省を表敬訪問し、その後バンコクでも屈指の進学校を訪問しました。続いてバンコクから車で3時間北にあるナコンサワン県の公立学校やアユタヤ県の私立学校を訪れました。今回は、そこで行われたプログラムの様子を紹介します。

## タイの教育

タイの教育は、小学校から中学校まで9年間の義務教育に加え、幼稚園と高等学校も無償教育となっています。また、タイでは昔から、ボーイスカウトやガールスカウトが授業科目としてあり、実際に学校に行くとスカーフをまいた制服姿の子供たちをたくさん見かけました。日本と違って特徴的なのは、毎朝全校朝礼があることです。みな教室に入る前に、全校生徒が外の講堂で整列し、国旗掲揚、国歌斉唱をします。

また、新しいSTEM教育 (Science, Technology, Engineering and Mathematics) を推進しており、理数系科目への毛嫌いをなくすため、先生が自ら魔法使いに扮してエンターテインメントを交えた授業を行っています。今までの詰め込み教育から、アクティブラーニングへの移行は日本と同様進んでいます。

## タイの文化

タイは、14世紀に建国されたアユタヤ王朝が国際貿易で栄え、外国から多様な文化を受け入れてきた歴史があり、その様子は食べ物や衣服などさまざまところに表れています。タイ料理は、中華料理の揚げたり蒸したりといった調理方法や、インドからはスパイスの伝統、西洋からは唐辛子や菓子の影響を受けてきました。様々な食材を使ったタイ料理を毎食味わえるのも本プログラムならではの魅力でした。多文化の時代と呼ばれる現代において、これまで様々な伝統文化を包摂してきたタイの教育の在り方は、今後の新しい教育の在り方を示すものとして期待を感じるものでした。



STEM教育の授業の様子

## プログラムへの期待

本プログラム団長で、これまで多くの教員をACCUの教職員交流プログラムに送り出している上板町立高志小学校の武田校長は、このプログラムについて、「参加教員の考え方、物の見方が変わる」と語ります。参加者の中には、「今まで、日本で自分が行ってきた教育は正しかったのか」と、思い悩んで相談する教員もいたそうです。旅行とは違い、実際に現地の学校を訪れ、他国の教員と膝を突き合わせてじっくり話し、ときには、教師としての同じ悩みを共有してほっとする。そして、何より元気いっぱい子どもたちと交流することができる。教育に決して正解はないこと、多様な考え方を共有することでお互いの教育を高めあえることなど、このプログラムは非常に多くの学びを含んでいました。実は、今回の企画は、過去に日本でのプログラムに参加したタイ教職員が、喜んで訪問団を受け入れてくれたことに支えられているのですが、こうしたことが、このプログラムの学び多き成果に繋がっているのかもしれない。

このようにして、今回の交流事業をきっかけに相互交流が始まったことはとても喜ばしく、これから多くの日本の先生がタイへ訪問し、相互交流が長く続くことを願っています。

**DATA**  
 派遣期間：8月26日(日)～9月1日(土)  
 訪問先：バンコク、ナコンサワン、アユタヤ  
 参加者：7名



タイの先生と訪問団の夕食交流

第12回日本代表団派遣支援事業報告会

# 2018年度全日本高校模擬国連大会の開催を控えて

国際教育交流部 岡野 晃一

ニューヨークで開催された高校模擬国連国際大会(5月11日～12日)に参加した派遣生6チーム11名が、6月24日(日)に日本出版会館会議室にて行われた報告会で、自分達が経験したことを披露してくれました。

「自分の成長を実感できるような充実感を味わえた」「派遣を通して得た最も大きなものは自信である」「どんな場面に今後遭おうとも、この国際大会で見出した確かな希望が自分を前に進めてくれることを確信した」「俯瞰的に物事をとらえる重要性を実感した」「周りの意見に耳を傾け、自分の主張を丁寧に伝えようという熱意、他人を惹きつける人間的な魅力がなければ、本当の意味でリーダーにはなれないことを実感した」「世界中の高校生の計り知れない器の大きさと優しさを身に染みて感じた」「出会った素晴らしい人たちとの繋がりはこれからもずっと大切にしていきたい一生の財産である」「他言語でもしっかりと議論できる人間になりたい」「世界に出ていくために乗り越えなければならない物事がたくさんある」「ニューヨークでのすべての経験はまさにlife changingなものになった」「自分が逆境に立たされた時でも道を切り開いていく手助けとなり、心を折らずに頑張る支えになると確信した」などのコメントを残してくれました。

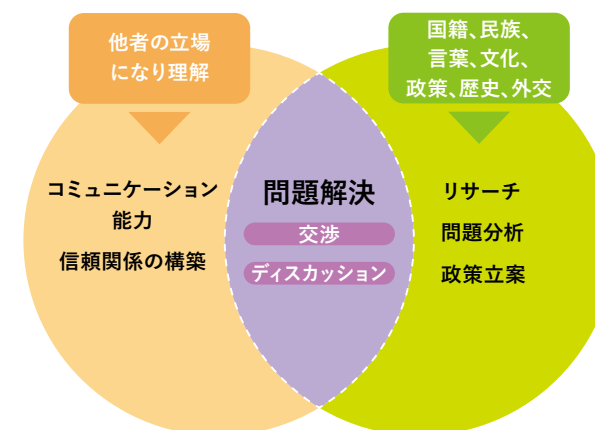
高校生たちがこのように感じてくれたこと、素晴らしい



2018年度渡米報告会の様子(頌栄女子学院高等学校の生徒たち)

いですね。今後どんな人生を歩むことになるのか、本当に楽しみです。他の高校生の皆さんもこのような経験をして頂きたく、今大会より3年間、地方創生枠2チーム(最大)を設け、今まで国際大会へ出場経験のない都道府県にある高校生たちにも日本代表団に加わってもらうことになりました。今大会は全国から215チームの申し込みがあり、書類選考を経て86チームに絞られた最精鋭の高校生たちが国際連合大学(11月17日～18日開催)にて「武器移転」をテーマに議論を交わす予定になっています。結果については次号のACCUニュースを楽しみにしていただきます。

## 模擬国連とは?



一国の大使になりきり、国際社会の解決策を見出す。豊かな国際感覚と社会性を有した、未来のグローバルリーダー育成のために行われる。

## 第12回全日本高校模擬国連大会スケジュール

事前に議題と担当国を知らされた参加者は、綿密なリサーチを行い政策を立案、いかに議場に反映させるかの戦略も行う。

11/17(土)	11/18(日)
開会式 会議細則の説明 昼食	<b>2nd Session</b> 1日目の作業文書を精査、議案をまとめる。 昼食
<b>1st Session</b> 議論の進め方を決める(論点・地域・同じ立場など議題の解決に最適な進行方法を話し合う)。担当国の立場や地域に基づいた論点を発表し、終了時に作業文書提出する。	<b>3rd Session</b> 決議案作成を目指す。 Review(受賞校の発表) 閉会式

\*決議案と同じ形式の文書



中国政府日本教職員招へいプログラム

## パワフルに発展する地方の教育

国際教育交流部 高松 彩乃

日本の学校には、外国につながる子どもたちが多く通っています。その中でも、中国からの子どもたちがその割合の多くを占めています。教育現場で中国の子どもや家庭と出会う機会は年々増えていますが、実際に中国の学校の様子を見た経験のあ

る人は多くはないことでしょう。今年度のプログラムでは、7日間で北京・甘粛省蘭州市・上海の3つの地域を回り、6校の学校と文化施設を訪問しました。広大な中国では、地域による教育格差が大きな課題です。北京の教育部で「どの地域でも一定レベルの教育を受けられるよう、国を挙げて取り組んでいる」という説明を受けて内陸の甘粛省に向かった訪問団が目にしたのは、北京との格差を感じないほど充実した学校の姿でした。北京の名門小学校の「分

校」や、今まさに作られつつあるテクノロジー新区に移転したばかりの学校などを訪問し、甘粛省内にハイレベルな教育環境が整備されている様を見せていただきました。このような学校に入学するためには激しい競争があることは想像に難しくありませんが、パワフルかつスピード感を持って地方の教育発展に取り組んでいる中国を体感する貴重な機会になりました。

**DATA**  
派遣期間：6月3日(日)～9日(土)  
訪問先：北京、甘粛省、上海  
参加者：25名



放課後活動で砂絵に取り組む蘭州の小学生

サステナブルスクール研修会報告

## 持続可能な学校を創るための「ビジョン」

教育協力部 篠田 真穂

2016年度に誕生した24校のサステナブルスクールの活動が、今年度で3年目を迎えました。断片的ではなくESDを学校全体で進めていくことによって根付き、育ち、事業終了後も自走していくことができるような底力を育む事業です。現在、校内で働く教員によって決定した持続可能な学校を創るための「ビジョン」に、学校のあらゆる要素をつなげた「ホールスクールアプローチ・デザインシート」をツールとして、各学校でESDを推進しています。7月の研修会では、この各校の活動を可視化したデザインシートをもとに、

各校の活動を知り合う時間を持ちました。また、3年間を通して変容があったか、3年前と比べ育まれたところがあるか、対話を通して振り返る機会も持ちました。今後も、教員の異動など大きな壁にぶつかり悩みながらも、少しずつ前進する各校の姿を発信していきたいと思えます。サステナブルスクールについて詳しく知りたい方は、ユネスコスクール公式ウェブサイト (<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>)にあるバナーをクリックしご覧ください！

**DATA**  
開催期間：7月21日(土)  
開催場所：東京  
参加者：30名



サステナブルスクール研修会の様子

韓国政府日本教職員招へいプログラム

## 合言葉は「共に」

国際教育交流部 伊藤 妙恵

変化のスピードが著しいと言われる韓国ではどのような教育が行われているのでしょうか。訪問団のBグループは「ひとりの子どももあきらめない」教育方針を掲げる蔚山(ウルサン)広域市を訪れ、教育庁、特別支援学校、小学校を視察しました。この蔚山の教育方針は、住民によって直接選挙(4年に1度)で選ばれ、7月1日に就任したばかりの新しい教育監(日本の教育委員会教育長にあたる立場)が掲げたものです。「ひとりの子ども」の中には、管轄する学校442校に通う、約16万の子どものおよそ2%にあたる外国

籍の児童生徒(一般校に通学する)も含まれています。訪問先でよく耳にしたのは、「共に」「一緒に」という言葉でした。初日にソウルで行われた、韓国の教育政策に関する講義の中で、「共に」成長していく教育体制について触れられていたことが思い出されます。地方都市の蔚山で子どもの教育格差をなくす努力を着実に進め、すべての子どもが「共に」成長することを目指す考えが、学校現場の教員配置や施設の整備状況から感じられ、そ

の意気込みが伝わってきました。そして「共に」とは、生徒同士、生徒と教員だけでなく、学校と保護者、学校と地域という考え方も併せています。訪問させていただいた小学校には、共働き家庭の子どもを世話するため、学校が運営する児童福祉室の他に、自治体が運営する地域福祉センターがあり、協働しながら子どもを育てていく充実した環境を目の当たりにしました。

**DATA**  
派遣期間：7月10日(火)～16日(日)  
訪問先：ソウル特別市、慶尚南道昌原市、蔚山広域市、釜山広域市  
参加者：49名

小学校のプログラミングの授業。タブレットPCを用い、ロボットを動かしている。



文化遺産の保護に資する個別テーマ研修

## 修復技術を自国で役立てるために

文化遺産保護協力事務所 研修事業部 国際協力課 脇谷 華代子

奈良事務所では、2018年7月24日から8月7日まで、アフガニスタン・バングラデシュ・パキスタンから5名の研修生を招き、「博物館等における文化財の記録と保存活用」をテーマにした研修を開催しました。博物館収蔵品に関する研修は、2015年から毎年実施しており、今回が4回目です。これまでに、南アジアの3か国(ネパール・スリランカ・モルディブ)、東南アジアの3か国(カンボジア・ラオス・ミャンマー)、太平洋地域の3か国(フィジー・パプアニューギニア・ソロモン諸島)が参加しています。

具体的な研修プログラムは、毎回、参加者の要望に沿って構成しますが、今回は科学的な調査方法と保存修復の技術を重点的に学ぶ内容になりました。なかでもアフガニスタン・パキスタンの国立博物館では、近々、蛍光X線による分析装置を導入する計画があるようで、準備が必要とのことでした。そこで、奈良文化財研究所の保存修復科学研究室に出向き、機器の使用手法やデータ分析の留意点などについて、多くの実習を交えながら、一週間かけてじっくりと基礎を学んで頂きました。また合間を縫って、元興寺文化財

研究所など地元の関係機関を訪れました。各種の保存修復ラボを視察しながら、多くの研究者の皆さんと意見交換する絶好の機会になりました。奈良で学んだことの一つでも二つでも、自国の仕事で役立ててもらえれば幸いです。

**DATA**  
開催期間：7月24日(火)～8月7日(火)  
開催場所：奈良  
参加者：5名



\*今年度より文部科学省ユネスコ活動補助金「ESDの深化による地域のSDGs推進事業」として生まれ変わりました。



# 気候変動プロジェクト終了を迎えて

教育協力部主任 藤本 早恵子



参加校の活動風景



ACCUがユネスコ主導の「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」において、優先行動分野2「機関包括型アプローチ」のキーパートナーとなって早4年。その貢献の1つが、ユネスコのフラッグシップ・プロジェクトである「気候変動をテーマにしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト」にナショナル・コーディネーターとして関わったことです。

このプロジェクトは、25か国約250のユネスコスクールが参加し、2016年9月から2018年3月まで実施されました。日本からも10校が参加して、気候変動という地球規模の共通課題へ向けた学校・地域レベルの活動を各国の仲間たちと情報交換しながら実践してきました。

プロジェクトのねらいは、気候変動をテーマとした活動をホールスクールアプローチで実践することにより、ESDが学校全体に根付き、そこに関わる全ての人に変容をもたらす学びの場を醸成することです。

このねらいを達成するために、プロジェクトがどのようなプロセスで進められたかについては、右表をご覧ください。日本の参加各校の活動としては、例えば、気候変動をテーマとした演劇の制作、学

校周辺の二酸化炭素量の調査・分析、校内の緑化活動(グリーンカーテンなど)、地域や保護者に公開される研究発表会での気候変動についてのポスター展示やプレゼンテーションなど、学習段階に応じて様々な活動が展開され、子どもたちが先生や地域の方々とともに学びを深めていきました。

多くの成果をもたらしたこのプロジェクト、なんとその集大成として、ドキュメンタリー動画も制作されました! 日本の参加校の様子も紹介されていますので、ぜひご覧ください。約2年にわたる国際プロジェクトのエッセンスを感じられるすてきな動画に仕上がっています。(URLはACCUホームページ等で近日公開予定)

ACCUの本プロジェクトメイン担当者である若山は、「どの学校も短い期間で様々な工夫をこらし、教育活動そのものにとどまらない、学校組織としてのESD実践を見せてくれた。大変やりがいのあるプロジェクトだった。」と語ってくれました。ESD推進におけるホールスクールアプローチの重要性を体現してくださった参加校の皆様、どうもありがとうございました! ACCUは今後も

- 2016年10月**  
国際ファシリテーター研修(ダカール)  
参加者 各国教員代表2名+ナショナル・コーディネーター1名  
内容 プロジェクト趣旨の理解、国内研修ファシリテーターとしての知識・技能習得
- 2017年1月**  
ファシリテーターによる国内研修(東京)  
参加者 参加校10校の教員  
内容 気候変動への理解、アクションプラン策定のための準備
- 2017年2~4月**  
各校にてアクションプラン策定
- 2017年4月**  
各校の活動開始  
参加者 教員、児童生徒、地域の方々など
- 2017年7月**  
国内参加校中間報告会(東京)
- 2017年12月**  
国内参加校交流会(福岡)
- 2018年3月**  
各国参加校とのビデオ会議①  
参加者 日本・デンマーク・レバノンの参加校教員・生徒など、ユネスコ職員  
内容 各校の取組み紹介、質疑応答
- 2018年3月**  
各校の活動終了、報告書提出
- 2018年5月**  
各国参加校とのビデオ会議②  
参加者 日本・モンテネグロ・インドネシアの参加校教員・生徒など、ユネスコ職員  
内容 各校の取組み紹介、質疑応答
- 2018年5月**  
各国ナショナル・コーディネーターとのオンライン報告会  
参加者 日本ほか約15か国のナショナル・コーディネーター、ユネスコ職員
- 2018年6月**  
各国参加校とのビデオ会議③  
参加者 日本・ウガンダの参加校教員・生徒など、ユネスコ職員  
内容 各校の取組み紹介、質疑応答
- 2018年8月**  
ドキュメンタリー動画の制作

ユネスコと緊密に連携しながら、ESDの普及と持続可能な社会の実現に貢献していきます。

**DATA**

国内参加校: 横浜市立永田台小学校、大牟田市立吉野小学校、大田区立大森第六小学校、名古屋国際中学校・高等学校、広島県立安古市高等学校、千葉県立桜が丘特別支援学校、愛知県立みあい特別支援学校、横浜シュタイナー学園、京田辺シュタイナー学校、箕面こどもの森学園

**第11回トッパンチャリティコンサート**

詳細…P5  
①6月1日(金) ②凸版印刷株式会社 ③東京 ④約400名

**中国政府日本教職員招へいプログラム**

詳細…P8  
①6月3日(日)~9日(土) ②中国教育部、文部科学省、ACCU ③中国 ④参加者22名 随伴者3名

**第12回日本代表団派遣支援事業報告会**

詳細…P7  
①6月24日(土) ②ACCU ③東京 ④100名

**第1回ASPUnivNet連絡会議**

①7月1日(日) ②ACCU ③東京 ④36名

**韓国政府日本教職員招へいプログラム**

詳細…P8  
①7月10日(火)~16日(日) ②韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)、文部科学省、ACCU ③韓国 ④参加者45名、随伴者4名

**平成30年度サステナブルスクール研修会**

詳細…P9  
①7月21日(土) ②ACCU ③東京 ④30名

**奈良 文化遺産の保護に資する個別テーマ研修**

①7月24日(火)~8月7日(火) ②文化庁、ACCU、国立文化財機構奈良文化財研究所 ③奈良 ④参加人数:5名(バングラデシュ2名、パキスタン2名、アフガニスタン1名)

**第2回全国高校教育模擬国連大会**

①8月6日(月)~7日(火) ②ACCU・全国中高教育模擬国連研究会 ③東京 ④700名

**タイ政府日本教職員招へいプログラム**

詳細…P6  
①8月26日(日)~9月1日(土) ②タイ教育省、文部科学省、ACCU ③タイ ④参加者5名、随伴者2名

**国際識字デーイベント2018**

詳細…P5  
①9月7日(金) ②ACCU、日本ユネスコ協会連盟、シャンティ国際ボランティア会 ③東京 ④約50名

**SDGs 達成に向けたアジア地域 ESD ワークショップ**

詳細…P4  
①9月10日(月)~14日(金) ②ユネスコ、岡山大学、岡山市、岡山ESD推進協議会、ACCU ③岡山 ④約30名

**奈良 文化遺産の保護に資する集団研修**

詳細…P9  
①9月4日(火)~10月4日(木) ②文化庁、ACCU、国立文化財機構東京文化財研究所・奈良文化財研究所 ③奈良 ④16名

**ACCU INFORMATION**

**新メンバー紹介**

今年4月にACCUに入りました新メンバー3人をご紹介します。写真の左から教育協力部の大類由貴、国際教育交流部の藤澤弥生、右端が岡野晃一です。新メンバーによってACCUに新しい風が舞い込みました。さっそくこちらの3人に今後の抱負について語ってもらいました。

教育協力部でユネスコスクール事務局とASPUnivNet事務局を担当しています。温かいACCUの皆さんの雰囲気がとても好きです。一日も早くACCUに貢献できるよう努めてきます。どうぞよろしくお願いします。(大類)

国際教育交流部で模擬国連を担当している岡野です。教職員・大学生・高校生の国際交流・グローバル人材育成に少しでもお役に立つことができよう頑張ります。(岡野)



4月から国際教育交流部のメンバーとなり、教職員国際交流事業を担当しています。日本・韓国・中国・タイ・インド、アジアの様々な国の先生方の出会いのお手伝いができればと思います。よろしくお願ひ致します。(藤澤)

**ACCU INFORMATION**

**新オフィス紹介**

ACCUは2018年10月1日より、オフィスを東京・神保町に移転しました。神保町といえば大小様々な出版社があり、日々新しい物語が生み出されています。また世界最大級の本の街としても知られる神保町は、専門書から軽い読み物まであらゆる本が集まる、書籍のシルクロードのような場所ともいえます。アクセスの良い場所にありまして、お近くにお越しの際はぜひお気軽にお立ち寄りください。

**新住所**

〒101-0051  
東京都千代田区神田神保町1-32-7F  
出版クラブビル  
電話: 03-5577-2851  
FAX: 03-5577-2854  
地下鉄神保町駅A5出口より徒歩3分

